

統計の与えるイメージ

国立大学法人埼玉大学監事 木内 治

(元総務庁統計局統計基準部統計企画課長)

1 留学生数

大学に勤務してから、目にする統計的数値も今までとは違ったものになりました。例えば、留学生数です。大学による国際交流・協力としては、海外の大学との大学間交流協定による研究等の協力などの活動がありますが、留学生の受入れも重要な柱です。我が国の留学生の受入れについては、昭和58年に策定された「留学生受入れ10万人計画」に基づく政府の様々な取組みにより、平成15年に留学生数が10万人を超え、同年12月には、中央教育審議会から、新たな留学生政策の在り方についての答申が出されています。埼玉大学のキャンパス内で留学生に出会う機会も多く、留学生数が増えたということは、私の生活実感にも符合しています。

しかし、もう少し仔細に見てみると、「留学生」の中には、実は、大学（学部）、大学院、短期大学、専修学校（専門課程）、大学に入学するための準備教育課程等に在籍している外国人学生が含まれています。もちろん、大学・大学院で学ぶ留学生が絶対数では多く、平成15年における約11万7千人の留学生の75%を占めます。しかし、増加率でいくと、我が国の留学生数は、平成11年（約5万6千人）以降、急速に伸びていますが、その内訳は、大学院で1.3倍、大学で2倍以上、これら以外で3倍以上となっています。こうしたことから、[留学生=大学や大学院で学ぶ外国人学生]というイメージを持っている人は、留学生数や増加率の数値について、その正確な内容とは若干異なる理解を持つことになるように思います。統計の作成に当たっては、ある数値が属する集団を一定の短い「言葉」で表章して、その内容を表すことが必要となりますが、これは結構難しく、日常普通に使っている言葉を用いる場合でも、注意する必要があると感じさせられました。用語を定義している注記まで読む人は、割合に少ないものです。

2 学生の就職内定率

国立大学においても（特に国立大学法人化以降）、学生の就職は、重要な関心事です。現下の厳しい経済情勢の下で、大学は、就職相談、セミナーの開催、ガイドブックの配布等、様々な学生への就職支援活動を行っています。

こうした中、毎年3月上旬になると、厚生労働省と文部科学省が共同で実施した「大学等卒業予定者の就職内定状況」調査（2月1日現在）の結果が発表されます。平成16年度の大学についての調査結果

■統計の窓

の概要は、「大学の就職内定率は82.6%で、前年同期を0.5ポイント上回る。男女別にみると、男子は83.5%（前年同期を0.7ポイント上回る）、女子は81.5%（前年同期を0.3ポイント上回る）」というものでした。この内容は、新聞やテレビでも報道されており、およその内容を記憶に留めている方が多い情報であると思います。

さて、この調査は、どのような設計で行われているのでしょうか。調査対象の大学62校（うち国立大学21校。ちなみに平成16年度、大学は700校強、うち国立大学（大学院大学及び短期大学を除く。）は83校あります。）、調査対象人員は、大学、短期大学、高等専門学校合わせて5,300人（ちなみに平成17年3月の大学卒業予定者数は約55万2千人です。）となっています。この調査結果を踏まえて内定率等が算出されていますが、その誤差はどの程度のものでしょうか。いずれにしても、前年度も同じような調査を行っていますので、前年度との比較は可能ではないかと思います。しかし、例えば、この場合の内定率の前年度との差がどれくらい有意かは、よく考えてみる必要があるのではないのでしょうか。それにもかかわらず、こうした調査結果が発表されると、発表された数値自体が正確なものとして受け取られ、流布する傾向があるように思います。

3 統計的数値の与えるイメージ

統計の利用者というより、統計的数値をなにげなく見る人の立場から二つの例を挙げましたが、どちらも、統計的数値が、一般の人々の知識やイメージの形成（例えば、留学生数とか学生の就職内定率に対するイメージ）に対して、大きな影響力を持っているという内容をも含むものであると思います。統計の作成に携わられる方々が、こうしたことにも思いを致されて、世界に誇る日本の統計を今後も作成していただければと思います。